

W. G. ゼーバルトにおける間テキスト性について

－『土星の輪』第7章を手がかりにして－

大河内 朋 子

要旨：ゼーバルトの物語世界は「間テキスト性」を特徴とし、主副二つの声が響き合う多声音楽的な物語として捉えることができる。拙論においては、「引用・剽窃・暗示」されたテキスト断片が、ゼーバルトの物語世界を読み解くためのサブテキストであることを、『土星の輪』第7章の分析をとおして考察する。

第7章では、人生における「親和性と照応」という思想が展開されるが、挿入された引用テキストは、各人物相互の「親和性と照応」の根底に、「故郷の不在・喪失」や「中間地帯でのとどまり」というゼーバルト固有の問題圏が隠されていることを明かしている。

1

「間テキスト性」は、ゼーバルト W. G. Sebald (1944–2001) の文学的著作の特徴であり、作者の死を契機として高まりを見せたゼーバルト研究においても、その初期段階から研究関心と呼び起こし、今日に至るまで、欧米を中心に学術的考察が蓄積されてきている。ゼーバルト作品の「間テキスト性」の機能は、物語世界の一貫性、ゼーバルトの歴史哲学、特殊な記憶モデル、そして読者の受容プロセスの制御などに関わるとされる。¹⁾ 引用元テキストが明示的に一字一句書き写される時、あるいは暗黙のうちに他者のテキストが借り受けられる時、それらの断片的テキストは引用元の文脈とともに、ゼーバルトの緻密に織られた言語テキストの中で、受け入れ側テキストと注意深く結び合わされる。テキストという織物においては、すべてがあるべき場所にあるのだとすれば、ゼーバルトの作品においても、引用元テキストと受け入れ側テキストの不連続や断絶は許されず、引用されたテキスト断片はあるべき場所において受け入れ側テキストに織り込まれ、受け入れ側テキストの文言と相互に密に結び合わされて、一つの完結した物語世界を成立させているはずである。「間テキスト性」を特徴とするゼーバルトの物語世界は、引用元のテキスト断片と受け入れ側テキストの融合により生じた二重露光とも言える物語レベルにおいて一貫性をもつことになり、複数の声が響き合う多声音楽的な物語として捉えられなければならない。拙論においては、引用元の断片的テキストは、ゼーバルトの物語世界を読み解くための有力なサブテキストであり、物語世界を「補強する支柱」²⁾ ともいふべき役割を果たしていると捉えておきたい。さまざまな強さでそれと分かるようにマーク付けされた複数のテキスト断片の挿入は、一方でプリコラージュ技法のように、物語の明瞭さを奪う謎めいた要素として読者を惑わすかもしれないが、他方では、読者が引用元テキスト断片の出自した元の文脈の中に足を踏み入れるならば、まさに引用箇所こそが、ゼーバルトの物語世界を解き明かす鍵となるのである。³⁾

拙論ではジュネットに従って、次のように「間テキスト性」を定義しておく。

「二つ、あるいはいくつかのテキストの共存関係、すなわち（略）あるテキストが別のテキストの中で効果的に現前していることと定義する。そのもっとも単純でかつ「テキストの間」という字義にもっとも忠実な形での間テキスト性は、（引用符号付きだが、正確な出典は明示されていたりいなかったりする）伝統的な「引用」の実践である。引用ほど明示的ではなくて規範的でもない形での間テキスト性は、（たとえばロートレアモンに見られるような）「剽窃」の実践であり、剽窃というのは引用のように字句どおりの借用をしているのだけれど、それと明示していない借用のことである。そしてさらに明示的ではなくて、字句どおりの借用でもない間テキスト性は、「暗示」の実践である。暗示とはすなわち、その言説を完全に理解するためには、その言説と、その言説のあれやこれやの言い回しが関係している別の言説との関係を認識することが前提になっていて、そうした関係の理解なしにはすっかり分かったとはいかない、そんな言説のことである。」⁴⁾

ジュネットは「間テキスト性」を、引用元テキストの明示性や引用元テキスト文言への正確さの度合いに応じて、「引用」、「剽窃」、「暗示」の三つに区分しているのが、ゼーバルトの作品においては、「引用」、「剽窃」、「暗示」のいずれの「間テキスト性」をも認めることができる。ゼーバルトは、彼自身の次の言葉が示しているように、意図的に「間テキスト性」を用いていたのである。

「私は、自分自身の著作において、自分が惹かれていると感じている人たちから美しいイメージやいくつかの特別な言葉を借りることによって、彼らに対して私の敬意を示そう、いわば彼らの前で帽子をひょいとはつまみ上げて会釈しようと、いつも試みてきました。」⁵⁾

ゼーバルトは、他者のテキストからの「引用」、「剽窃」、「暗示」によって、敬愛する文学の先達に敬意を表すると同時に、二つのテキストを木霊のように響き合わせて、自らの文学テキストにより豊かな意味内容をもたらそうとしたのである。

ゼーバルトの引用元テキストは、ドイツ語圏の作家、とくに広義でのオーストリア文学に由来することが多い。ドイツ文学者ゼーバルトが、オーストリア文学に特別な関心を持ち、たとえば、シュティフター Adalbert Stifter (1805-1868)、ホフマンスタール Hugo von Hofmannsthal (1874-1929)、カフカ Franz Kafka (1883-1924)、ハントケ Peter Handke (1942-) などに關しては、複数の論考を残していることから見て、それは必然的ななりゆきであると言えるだろう。

2

『土星の輪』*Die Ringe des Saturn*⁶⁾で、ゼーバルトはイギリスのノーフォーク州を巡る語り手による旅の報告を外枠として、多種多彩な素材を読者の眼前に繰りひろげてみせている。語り手である「私」は、外枠をなすノーフォーク州の風景や人物と関連させながら、旅の逸話を物語り、地域の経済的・政治的な事実に言及し、哲学的・文学的な伝統を思い浮かべ、文化・経済・歴史の相互関係を指摘し、文化史的な省察を開陳してみせる。旅のエピソードは、一見したところ、語り手の「私」が実際に遭遇した順序に従って記述されているかのように見える。しかし、旅行実録と言い切るには、密かに多くのフィクションが織り交ぜられているようであり、⁷⁾ 小説というフィクショナルな文学ジャンルに押し込めるには、多数の写真の挿入が示しているように、ゼーバルトの物語は現実の事象と密接に通じ合っているように見える。おそら

くは、ゼーバルトの語り手はこの散文作品において、フィクションとノンフィクションという従来のジャンル分けに捕らわれることなく、事実と虚構の境界線を巧みに消し去っていると考えるのが妥当ではないだろうか。つまりこの作品では、「実際には、歴史を解釈するための、人々の生活の局面を描くための、哲学的な問いを立てるための出発点として使えるような人々や出来事、建物、写真、そしてテキストが選び出されている」⁸⁾と考えられるのである。『土星の輪』は、あくまでも精巧に構成されたフィクションであり、ゼーバルトは、語り手が旅の途上で偶然遭遇したかに見せかけたエピソードを慎重に選び出して、効果的に構成し、歴史や人間生活などに関する哲学的省察を繰り返しているのである。

偶然と見せかけられた旅のエピソードの配置が、実は巧みに選択され構成された結果であることを、『土星の輪』第7章(RS 201-228)に則して検証したい。第1段落(RS 201-203)でダニッチ・ヒースの出現について歴史的知識が披露された後、第2段落(RS 203-208)で「ダニッチ・ヒースの迷路」が主題となる。この比較的長い段落は二つに下位区分できる。まず語り手が実体験した「迷路」での迷走が記述された後、その数か月後に見た「迷路」の夢が想起される。この「迷路」の夢の記述はさらに二つに分かれ、語り手の「私」は夢の中で「迷路」中央の高みから「迷路」の全体を眺め渡しているか、あるいは「迷路」の断崖の際から海辺の様子を見下ろしている。第3段落(RS 208-209)は比較的短くて、ダニッチ・ヒースの「迷路」をどうにか抜け出せた「私」が、旅の目的地であるミドルトン村に到着した時の様子を語っている。第4段落(RS 210-216)は、第2段落とほぼ同じ長さをもつだけでなく、第2段落と同じ構成を取っている。文中の「私」がだれを指すかによって、第4段落も二つに下位区分できるのだが、前半部の「私」はノーフォークを旅する語り手を示し、旧友マイケル・ハンバーガーのベルリンの幼年時代とその後のイギリス移住について語る。後半部はマイケルの自伝からの抜粋という体裁を取っていて、二つの挿入句(「... とマイケルは書く」(RS 211)、あるいは「... とマイケルは別の箇所を書く」(RS 214))によって、1947年のベルリン再訪時の体験が追想される箇所からの抜粋と、過去のベルリンと現在のサフォークの混交する夢や幻覚が述懐される箇所からの抜粋の、それぞれの始まりがしるしづけられている。最後の第5段落(RS 216-228)は、第7章全体のほぼ半分を占める長い段落であって、語り手の「私」がミドルトン村のマイケルの居宅に到着した記述で始まる。「私」の語りはやがて、「... とマイケルは言った」(RS 216)という挿入句を合図にして、ヘルダーリンと自分自身との「親和性と照応」(RS 217)について語るマイケルの独白に移行する。その後テキストは、語り手の「私」とマイケルとのあいだに認められる「親和性と照応」というテーマへと展開してゆく。その箇所において「私」は、まずマイケルの住まいでのデジャビュ体験を綴った後、同僚スタンレー・ケリーにおいてマイケルと「私」の人生行路が知らぬ間に交差していた驚きについて語る。第5段落最後の4分の1は、マイケルの妻アネの語る二つのエピソードに割り当てられている。一つは記憶力の乏しい村の男スクウィレルの逸話、もう一つはアネの見た夢の話である。そして第5段落つまり第7章全体のテキストは、井戸の水面を泳ぐゲンゴロウの形象によって閉じられる。

第1段落	ダニッチ・ヒース出現の歴史	
第2段落	前半	語り手の「ダニッチ・ヒースの迷路」での迷走
	後半	語り手のみだ「ダニッチ・ヒースの迷路」の夢
第3段落	語り手のミドルトン村への到着	
第4段落	前半	マイケルの幼年時代とイギリス移住
	後半	マイケルの自伝抜粋（ベルリン再訪時の回想と夢の告白）
第5段落	前段	マイケルの独白（マイケルとヘルダーリンの「親和性と照応」）
	中段	語り手とマイケルの「親和性と照応」
	後段	アネの語る二つのエピソード

ダニッチ・ヒースを通して、午後遅くミドルトン村に到着し、マイケルをその居宅に訪ったのち、暗やみに包まれた村を辞去したという半日間の旅の記録が第7章の外枠を形成し、その枠内において、「私」の「ダニッチ・ヒースの迷路」での迷走と夢、マイケルのイギリス移住とベルリン再訪、英独二つの時空間の混在するマイケルの夢、そして最後に二組の「親和性と照応」について語られている。

ここで第2段落と第4段落の構成に着目してみたい。どちらの段落においても、前半では、現実の体験とされているできごとが物語られ、後半では、記憶の中に固着したその体験によって、後日呼び出された夢ないし幻覚が取り上げられている。第2段落は語り手である「私」の体験と夢を、第4段落はマイケルのそれを語る。つまりこの二つの段落はパラレルに構成されているのであり、両段落のあいだに構成上の「親和性と照応」を認めることができよう。そしてこの構成上の「親和性と照応」は、第5段落で明確にテーマ化される「私」の人生行路とマイケルのそれとの「親和性と照応」を予告していると考えられる。構成の上で示された「私」とマイケルの「親和性と照応」というテーマの伏線は、「私」が「ダニッチ・ヒースの迷路」をさまよい、マイケルがベルリンを再訪したとき、二人ともが目眩または幻聴に襲われたという同一のエピソードによってさらに強められている。すなわち、ダニッチ・ヒースの「狂ったように花咲く」（RS 204）迷路から抜け出せないことで「混乱」（RS 204）し、最後に「パニック」（RS 205）に陥った「私」の耳の中では、「貝の中に潜む海のようにざわめく無言の音」（RS 205）が聞こえていたのであり、他方、「夢遊病すれすれの状態で」（RS 212）廃墟となったベルリンの街路をさまよい歩いたマイケルの耳の中でも、「何日間も何週間も絶え間なく、蓄音機の針がカリカリひっかく音」（RS 214）が止まなかったのである。

狂気に隣接したと言えそうな目眩ないし幻聴の体験というモチーフは、第2段落後半で引用された狂乱するリア王の科白⁹⁾を仲立ちとして、第5段落でのマイケル（後半生を精神の薄明のうちに過ごしたヘルダーリンの英訳者であった）訪問の場面へとつながっていく。第5段落では、第2段落と第4段落の構成上の類縁性によって予示されていた「親和性と照応」というテーマが主題化されて全面的に展開し、事実の一致という「照応」関係から、多少なりとも無理強いされた一致に至るさまざまな「親和性と照応」の具体例を動員して、マイケルとヘルダーリン、あるいは「私」とマイケルという二つの人生が宿命的に結びつけられていたことを証し立てるのである。

「ヘルダーリンの誕生日の二日後に生まれたがゆえに、ヘルダーリンの影が、一生のあいだ、その人に寄り添うものだろうか？（略）故国から追放されたがゆえに、15か16の歳で悲歌を

翻訳し始めるものだろうか？ 1770 という数字が、つまりヘルダーリンの生年が、その庭の鉄製の水くみポンプにあるというただそれだけのゆえに、後年になってサフォークのこの住まいに居を定めなければならないものだろうか？」(RS 217)

めめられた「親和性と照応」をいたるところに見出した語り手の「私」は、「私たちはみな、私たちの来し方と私たちの希望によってあらかじめ指示された同じ道に添って、一人また一人と次々と歩むのであるから、そのような偶然は私たちが思うよりはるかに頻繁に起こるのだと、自分に言い聞かせてみるが、そうすればそうするほど私は、ますます頻々と現れ出る反復の幻影に対して、私の理性の力では抗いえないのである」(RS 223) と観念して、「親和性と照応」という、理性以前のもう一つの真実を否定なしに認識するのであるが、それとともに、「私」はふたたび目眩ないし麻痺の状態に陥るのである。

「過度の疲労のためか、あるいは他の理由があったのか、私はあの8月の日の夕刻に、マイケルの家で、いくども足下の地面がさらわれるように思ったのであった。」(RS 224)

3

ところで、第7章のテキストは、目眩や狂気というモチーフを縦糸として、他者の人生との「親和性と照応」という思想を織り出しているだけであろうか。シェイクスピアやヘルダーリンからの引用箇所は、「私」やマイケルの目眩や狂気の強さをより巧みに表象する手段として、援用されたにすぎないのであろうか。第3段落において、語り手の「私」は見慣れぬ異邦人として、ミドルトンの村人から異様に強い違和感を持って迎えられているが、これは何を意味するのだろうか。また第5段落最後で語られるアネの二つのエピソードは、第7章全体のテーマとどのように関連しているのだろうか。これらの問いに対しては、『土星の輪』という多声音楽におけるもう一つの声部である引用テキストが、答えのありかを指し示しており、「親和性と照応」というテーマの背後に、もう一つの、ゼーバルトにとってはより深刻な問題圏が隠されていることを明かしてくれるのである。

第7章は次の文によって締めくくられている。

「タクシーの到着を待ちながら、私たちはヘルダーリンのポンプのそばに立っていた。そして私は、髪の毛の根元まで震えるほどに驚いたのだ。居間の窓の一つから石壁で囲われた井戸の穴に落ちる弱々しい光りの中で、一匹のゲンゴロウが水の鏡面を一方の暗い岸辺から他方の岸辺へと漕ぎ渡っていくさまを見たときに。」(RS 227 f.)

この箇所は、ホフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』 *Ein Brief* (1902年)からの借用である。

「それは同情などという、得心のいく人間らしい思考の連鎖と、なんの関わりがあろうか。私がある別の日の夕べに一本のくるみの木の下で、庭師の徒弟が置き忘れた半分まで水の入った如露を見つけるとき、この如露や、木の影でほの暗くなったその中の水や、この水の鏡面を一方の暗い岸辺から他方の岸辺へと漕ぎ渡っていく一匹のゲンゴロウやといったそうしたつまらぬもののこの組み合わせが、かの無限なものの現前によって私を震撼させ、私の髪の毛の根元からかかとの骨髄までを震撼させ、私が突然わっとばかりに話し出したときに (以下略)¹⁰⁾ (下線は引用者による)

よく知られているように、『チャンドス卿の手紙』は、フィリップ・チャンドスがフランシ

ス・ベーコンに宛てて、「文学的活動をすっかり断念するがゆえの自己弁明のため」¹¹⁾に書いた書簡という体裁をとっている。チャンドス卿が文学活動を断念した理由は、「活気あるうれしい瞬間に、私の日常的な身辺のできごとを、ちょうど器を満たすように、一段と高いあふれんばかりの生命でもって満たしながら私にその到来を告げているものは、まったく名の無きもの、おそらくはほとんど名付けえぬものなのだから」¹²⁾である。つまり日常の平凡な事物はときとして、「一段と高いあふれんばかりの生命でもって」満たされて、「崇高で感動的な刻印を帯び」¹³⁾ることがあるのだが、チャンドス卿はそのとき現前した「無限なるもの」ないしは「真の生」を語るための言葉を持たず、言葉に見放されたように感じていて、ただただ逆説的に、その「無限なるもの」を「まったく名の無きもの、おそらくはほとんど名付けえぬもの」と言うほかなかったのである。そしてチャンドス卿は、日常において生起するそうした驚異を表現するには、これまで使ってきた概念や抽象的な言葉、あるいは理性の言葉は、もはや使用不可能であると確信して、しかしそれに代わる言葉を見いだせないがゆえに、文学活動を断念したのである。¹⁴⁾

ゼーバルトが引用している井戸の水面を泳ぐゲンゴロウは、かの「無限なるもの」や「崇高なもの」を現前させている日常の取るに足りない、つまらぬものの一つということになる。ではゼーバルトの語り手もまた、チャンドス卿のように、ゲンゴロウという目立たぬものの中に、「かの無限なもの」や「真の生」が現前していることを経験して、「髪の毛の根元まで震えるほどに驚いた」のであろうか。いや、そうではあるまい。そうではなくて、ゼーバルトの語り手である「私」は、水面を泳ぎ渡るゲンゴロウに気付いたときに、チャンドス卿の抱えていた問題を想起したのであり、そこに「私」の抱える問題との「親和性と照応」を認めて、「髪の毛の根元まで震えるほどに驚いた」のではないだろうか。つまり、語り手の「私」は、チャンドス卿の状態を、「これまで用いてきた言語の無能力さ」と「これから用いるべき（と予感される）言語の不在」という「ふたつながらの不在のあいだの中間地帯」¹⁵⁾で揺れながら、「これから用いるべき（と予感される）」がいまだ不在の言語の獲得へ向けて、ゲンゴロウのように「他方の岸辺へと漕ぎ渡って」いるところであると捉えて、そうしたゲンゴロウの姿に、自らの意志により「不在の場」としたドイツから、いまだ「不在の場」でありつづけるイギリスへとドーヴァー海峡を越えて「漕ぎ渡って」いった「私」自身の姿を重ね合わせたのではないだろうか。移住先のイギリスがいまだ「不在の場」であることは、第3段落のエピソードが示している。ミドルトンの村で「私」は、見慣れぬ異邦人として、村人から疑いの眼差しで迎えられている。村の家々は私に「はねつけるような印象」(RS 208)を与え、食料品店の娘は、「別の星からきた生き物を見るかのように、ぼかんと半分口を開けて」(RS 209)私を見つめ、「私」自身も自分がひどく「場違い」(RS 208)であるかのように思っている。

「もしも突然、わんぱく小僧たちの一団が私の後ろから飛び出してきたり、あるいはミドルトンの家主の一人が家の敷居を跨ぎ越えて、私に向かって「とっとと消え失せろ！」と叫んでも、まったく驚かなかっただろう。」(RS 208 f.)

いかに流ちょうに英語を操ろうとも、いかに長くイギリスに滞在しようとも、「私」はイギリスにおいてアウトサイダーでしかないと意識している。¹⁶⁾「私」はイギリスとドイツという「ふたつながらの不在のあいだの中間地帯」で、ゲンゴロウのように揺れ動いているのである。

ゲンゴロウの形象は、同じくドーヴァー海峡を渡ってドイツからイギリスに亡命せざるを得

なかったマイケルにも重なる。亡命者マイケルにとっても、幼年時代を過ごしたベルリンは、「あるのに隠されて見えない場所」(RS 212)、つまり失われた故郷なのである。

「こんにちベルリンを振り返ってみると、そこにはただ青黒い地と、その上に付着した灰色のしみのようなものがひとつ見えるだけです。石盤に石筆で描かれた線、不明瞭な数字や文字、B、Z、V、石盤拭きで一拭きされてぼやとなり、ぬぐい消されてしまう。」(RS 211 f.)

さらにゲンゴロウの形象は、1770 という数字を刻む鉄製ポンプのある井戸を介して、第5段落前半で引用されていたヘルダーリンの讃歌『パトモス』の、マイケルによる英訳テキスト断片へとつながっていく。

「間近に浮かぶ島々のひとつがパトモスだと聞いたとき、そこに立ち寄り、その暗い洞窟に近づきたいと、わたしは切に願った。」(RS 217)

『パトモス』の詩人は、精霊によって、陰深い森林を擁する故郷から、金色の霞の中で匂い輝くアジアへと誘い出され、やがてエーゲ海に浮かぶパトモス島を目にして、その島に憧れる。詩人の抱くパトモスへの憧憬は、その島が、迫害を逃れた使徒ヨハネが行き着き、黙示録を書いたとされるがゆえである。「私」やマイケル同様に故郷から異郷へと旅立った『パトモス』の詩人と遠く響き合いながら、ヘルダーリンの井戸のかたわらに立つ「私」もまた、パトモスをギリシャと小アジアのあいだの、すなわち古代ギリシャ文化とキリスト教のあいだの、文化的「中間地帯」に浮かぶ島として解していたのではないだろうか。

第5段落のエピソードで登場するスクウィエルという村人も、いつも喪服を身につけていて、いわば此岸と彼岸の「中間地帯」にとどまっていると言えるのだが、そのスクウィエルが、村人たちとともに演じる『リア王』のために覚えた唯一の科白もまた、故郷からの離反に関わっていた。

「うわさでは、彼の追放された息子は、ケント伯といっしょにドイツにいるということだ。」(RS 226、『リア王』4幕7場より)

以上のように、『土星の輪』第7章は、第一水準のテキストレベルにおいて、ヘルダーリンとマイケル、マイケルと「私」という二組のあいだに認められる「親和性と照応」を例示しながら、人生において「頻々と現れ出る反復の幻影」を認めるようにと読者に迫っているのであるが、そこにさらに、水面を泳ぎ渡るゲンゴロウの形象を導きの糸として相互につながる第二水準の引用テキストを重ね合わせてみると、彼らの「親和性と照応」の根底には、「故郷の不在・喪失」、「異郷への旅立ち」、「中間地帯でのとどまり」という三者共通の文化論的な問題圏が隠されていると推察できるのである。

註

- 1) Vgl. Schmucker, Peter: *Grenzübertretungen. Aspekte der Intertextualität im Werk von W. G. Sebald*. Diss. Bochum 2011, S. 17.
- 2) Schmucker, a.a.O., S. 18.
- 3) ゼーバルト作品を読み解く上で引用箇所のもつ重要性について、例えば Sheppard は次のように述べている。「もしも君がマックス（訳注：ゼーバルトのこと）の文学作品の深みに幾ばくかでも到達したいなら、つねに間テキスト性に気をつけなければならない。つまり、彼にとってもっとも重要だった書物を読み、批評文のなかでその書物についてどう述べているかを知らなければならない。どれほど多く

- の批評家がこれをしたがらないかには、びっくりする。」Sheppard, Richard: *Dexter - Sinister. Some observations on decrypting the morse code in the work of W. G. Sebald*, in: *Journal of European Studies*. 35 (2005), S. 421.
- 4) Genette, Gerard: *Palimpseste. Die Literatur auf zweiter Stufe*. Frankfurt a. M. 1993, S. 10. Nach: Schmucker, a.a.O., S. 27.
- 5) W. G. Sebald: *Le promeneur solitaire. Zur Erinnerung an Robert Walser*, in: Ders.: *Logis in einem Landhaus*. Frankfurt a. M. 2000, S. 139.
- 6) 底本として、W. G. Sebald: *Die Ringe des Saturn. Eine englische Wallfahrt*. Frankfurt a. M. 1997 を使用した。作品の発表は1995年である。以下、RSと略記し、引用箇所ではRSに続けてページ数を記載する。翻訳に当たって、W.G.ゼーバルト（鈴木仁子訳）『土星の輪 イギリス行脚』（白水社）2007年を参照した。
- 7) たとえば、ヒースの荒野野での「迷路」体験の数時間後に、語り手の「私」は、「迷路について語っているいま、思わず知らずあれがまるでただのこしらえごとのように思えるのだった」（RS 216）と吐露しているが、この箇所は、ダニッチ・ヒースでの「迷路」体験がフィクションであったことを示唆していると解釈できるかもしれない。
- 8) Siefkes, Martin: *Die Landschaft der Zeichen. Eine semiotische Analyse von W. G. Sebalds "Die Ringe des Saturn"*, in: Gévaudan, Paul u. a. (Hrsg.): *Philologie im Netz*. 49 (2009), S. 57. <http://web.fu-berlin.de/phin/phin49/p49t3.htm> (2017年10月31日取得)
- 9) “Lend me a looking glass; if that her breath will mist or stain the stone, why, then she lives.” (RS 208) シェイクスピア『リア王』5幕3場より。
- 10) Hofmannsthal, Hugo von: *Ein Brief*, in: Ders.: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben. Prosa II*. Hrsg. von Herbert Steiner. Frankfurt a. M. 1951, S. 15 f. この書簡の日付は1603年8月22日であり、「私」がマイケルを訪問したのも8月である。
- 11) Hofmannsthal, a.a.O., S. 7.
- 12) Hofmannsthal, a.a.O., S. 14.
- 13) Ebd.
- 14) 『チャンドス卿の手紙』の解釈に関して、とくに次の文献を参照した。岩切正一郎「立てかけられた箒：日常と驚異についての考察」[国際基督教大学キリスト教と文化研究所『人文科学研究：キリスト教と文化』46、2015年、207-249頁。]
- 15) 檜山哲彦「解説」[ホフマンスタール（檜山哲彦訳）『チャンドス卿の手紙 他十編』（岩波文庫）1991年、315頁。]
- 16) ゼーバルトはあるインタビューの中で、自身のイギリスでの滞在について、「私はここに30年間暮らしているが、しかし安らぎの場だと感じたことはほんの僅かすらない」（Mühling, Jens: *The Permanent Exile of W. G. Sebald*, in: *Pretext*. 7 (2003), S. 16. Nach: Catling, Jo: *W. G. Sebald: ein "England-Deutscher"? Identität - Topographie - Intertextualität*, in: Heidelberger-Leonard, Irene; Mireille Tabah (Hrsg.): *W. G. Sebald. Intertextualität und Topographie*. Berlin 2008, S. 26.) と語っているが、Catlingはこの発言を、「意識的なアウトサイダー的立ち位置」（Catling, a.a.O., S. 26）の表明と解釈している。